



「指示待ち」から「自ら生き抜く主体」へ —子どもの「生き抜く力」を育てる 「かながわ版防災教育プログラム」—



神奈川県 認定NPO法人かながわ311ネットワーク
理事（学校防災教育事業担当） 石田 真実

1 東北から託された約束

東日本大震災の被災地でのボランティア活動の中で、私は避難所で大変な生活を送る被災者から、大切な約束を託されました。「神奈川にも必ず大災害が来るからちゃんと備えておけよ。何かあったら助けに行くから、絶対に死ぬな、生き延びろ」。この東北の想いに応えるため、私たちは「自分のいのちを自分で守れる子どもを育てる」をミッションに2015年から防災教育事業を開始しました。このたび第30回防災まちづくり大賞において日本防火・防災協会会長賞をいただいた「防災教育出前授業・研修」は、その取り組みです。

2 先生と一緒に組み立てる 3つの手法

今、学校で行われている避難訓練は「誰のための訓練」でしょうか。従来の訓練は、大人が子どもを安全に誘導する「管理の訓練」になりがちでした。しかし本当に必要なのは、大人がそばにいないかもしれない瞬間に、子ども自身が「自ら状況を判断し、よりベターな行動を選択できる力（自助）」です。

しかし、多忙を極める先生方に新しい防災教育を一方的に押し付けることはできません。ヒアリング調査でも「専門知識がない」「これ以上新しい〇〇教育は増や

せない」という現場のリアルな悲鳴が上りました。そこで、学校がそれぞれの環境に合わせて柔軟に組み合わせられるよう開発したのが、「かながわ版防災教育プログラム」です。本プログラムは主に3つの手法でアプローチします。

- ①日常の授業へのプラス1：特別な時間を作らず、算数の「速さ」で津波の速度を計算する、国語で防災用具のカタカナを学ぶなど、日々の教科授業に3～5分の防災視点を取り入れ、知識を命を守る「知恵」へと直結させます。
- ②主体的・対話的な教材の活用：「DIG」「逃げ地図」「HUG」「クロスロード」の4つに絞り、班での協力と意見交換、合意形成を通して、災害リスクや避難生活のリアルを疑似体験します。
- ③訓練の工夫：指示待ちから卒業するため、予告なしの抜き打ち等で多様な訓練



かながわ版防災教育プログラムの全体像



HUG（避難所運営ゲーム）

をデザインします。訓練での失敗を叱るのではなく、振り返りを通して本番の命を救う「成功の種」へと育てます。

これらは学年ごとの学習事項を示した9年間のカリキュラムにまとめ、先生が書き足せるたたき台としています。

3 学校の学びが 地域に回りはじめる

3つの手法は、単発の授業で終わらずに年間の流れへ組み込むと力を発揮します。神奈川県内のある公立中学校では、4月に教師主導の避難訓練、夏休みに生徒・教職員・PTA・地域住民が参加する「防災学び塾」を開き、9月には生徒会が企画した予告なしの避難訓練を実施し、3月には学校を会場とする地域の避難所訓練に生徒が参加して、テント設営や受付、仮設トイレの準備を担います。一年を通じて防災教育の取り組みのサイクルが構築されました。学び塾に生徒会が加わったことが、生徒自身が訓練を設計する流れにつながりました。

ある年に実施した予告なしの訓練では、放送が聞こえないという声が上がりました。調べると緊急放送の機器が故障してい

ることが分かりました。子どもに訓練を委ねることは、大人が見落としていた危険を見つける機会にもなります。

学校には避難所運営という重い課題があり、地域の方が多忙な学校職員に遠慮して話し合えていない場面もあります。そうしたときは私たちが間を取り持ちます。こうした循環を支えるのはファシリテーターの人材です。役割を広げるため「防災教育ファシリテーター養成講座」で指導者を育て、これまでに初級編281名、上級編143名が修了しました。上級編修了者の約9割が、実際に子どもたちへの防災教育に携わっています。

防災教育ファシリテーター養成講座
上級編のまち歩き

4 子どもを信じて任せてみる

子どもは大人が限界を設けず信頼して任せれば、大人の想像を超えて自ら学び、地域を支える頼もしい「率先避難者」へと成長します。子どもたちの中に眠る生き抜く力を、学校・地域・行政が手を取り合い共に育ていけるよう、これからも活動を続けてまいります。